

松陰先生の居られた杉家又松下村塾（余が子供の時には村なく松下塾が通称であった）は余は能く覚へぬが、母の生家松本小新道の大野とは三十間以内の近距離に在って、其間垣一重十間計りの眼下に在て塾生の読書の声も聞いた。塾庭を騒いで居るのも見た。

余が母は天保三年生で先生より二年若く、其妹の余が叔母たる前小畑の厚東毅一の養母（常太郎妻ツタ）は天保六年生で五歳若かった。叔母は先生の妹君の友達でもあり、杉家には朝夕出入し、家事も手伝ひ、先生の母君にも愛されたそう。余が若い頃までは先生を研究する者今日の如くあらざりし為め、余も母と云ひ叔母と云ひ、先生の事を聞くに好便宜を持ちながら、敢て其事を為さざりしと思ふが、今となりては自分で自分の気が知れぬ感あり。左に記する一二の事柄は何角の時に聞きし話の耳底に存して居るものである。

母の話

先生兄弟が睦しく連立て通学されたのを常に見た。孝行人と云ふことを一般に評判し、「杉の兄弟は親の物なら足の皮でも食ひなさる」と言ふて居た。

叔母の話

夜遊びに行た時、折々先生が『女大学』や百人一首の講釈をして聞かされた。先生は座敷牢に居られて多く入浴もされず、近寄れば臭いこともあり、「君の側に来ると臭い」と言ふた。「そんなに嫌がるな東海道の間宿では女郎に招かれたよ」と戯言を言はれたこともあった。

「先生の江戸に護送さるる時に妾が稔丸さんに御暇乞を言はせて上げた」。其次弟は、先生の駕籠が大野の門前を通った。大野の門前は小新道で、杉の家から松本の市に出る道と新道とを繋ぐ長さ半丁程の小路で、此小路には大野の門が一つあるのみ。当日叔母は隣家の吉田稔丸君と打合せ、君を我門内の杉垣に大きな孔の出来て居る所に忍ばせて置き、叔母は外に在て遠見をした所が、駕籠が其孔の所に来た時駕籠夫が肩を代へて暫時止つたので、先生と稔丸君とが其垣の孔から師弟の訣別を為し、叔母も其所に来て御暇乞を申上げ、竹皮包の饅頭を駕籠中に入れたと云ふことである。叔母が「妾が御暇乞を言はせて上げた」と言ふたことから考へて見るに、此場合叔母が何か内密に策謀を廻らした様に思はれる。左なくば駕籠が恰も杉垣の孔の所で止つたり、又饅頭を入れさせたり、尚道順からすれば小新道に曲らず直ぐに松本市に出るべきに、態と曲り道をして新道を経たと云ふのが不思議だ。稔丸君も公然御暇乞の出来ぬ位な取締の厳重な間に在て此事ありしは叔母の働きとしか思はれぬ。十人並を超へた才智を持った叔母のことだから必ず上手に遣つたに違いない。

林 茂香著

幕末明治 萩城下見聞録

マリン書店

「火用心を見る」と言ふた。枕元に手燭火打箱を持って来る。斯て寝衣に着替へて床に入る。灯火を消す。母は賃仕事せぬから十時就床が普通であるが、夕食後の来客で酒が始まり遅くなることもあり、暮客の時には夜半になることもあった。

以上我母即ち主婦の一日中の行事であるが、其の中に就て尚少し委しく、述べて置きたいことがある。

○早朝に開門 朝早く門を開けること。当時一般の風であった。其れは閉門三日とか七日とか言ふ罰があつて、今の違警罪位なものだろう。白紙に閉門と墨書し、門の戸に貼付けられ、其の間昼夜門を開放することは相成らぬ。（町人は番頭とか何とか称へ、農家の事は知らぬ）故に朝遅くまで門を開けて居らぬ家は、閉門ではないかと言ひよつたからであろう。余が妻が今日でも女中には八釜しく言つて、朝早く門を開けさすのは此の遺習である。

○朝の洗面 洗面の仕方は、井戸側に手水盥を持って来て井戸水を汲み上げ、其の水を手盥に掬ふて口に含む。嗽茶碗など用ひぬ。歯を磨くに男は塩を手盥に入れ、其れを指に付け磨る。女は妻君となれば皆歯を染めて居るから、磨ることは出来ぬ。房楊子とて小さき棒の一端を砕き乱して水筆状としたものを持って歯の汚れを取る。男も房楊子を使ふ者があつた。手拭は肩に掛けて居たが、子供は手拭持たず、洗面を内の手拭掛の所まで持つて来て拭ふ。川島藍

内容見本

(77頁以下)

場川に浴ふた家の者は、大人でも川水で洗面して、其の湿面を抱へて家に帰る者を見よつた。○番茶 番茶は茶屋に売つて居たろうが、我家には川上に注文して一俵宛買ひ、之れが大きな洪紙袋に入れて吊してあつた。「川柳茶」も番茶に用ひた。之れは川辺に其木が沢山あり、春期余は母に連れられて其の葉を摘みに行つた。其れを蒸して乾かされた様に思ふが能く覚へぬ。「ザラ茶」も用ひた。之は我が畑に作ることもあり、農家で買ひました。

○木尻 薪の燃へ残りの四五寸以内のもので、之を木尻と称へ、木炭の代用として茶風呂には多く之を用ひ、炭となれる部分を前にし深く灰に埋め、朝湯を湧した時に火を沢山其の上に置くと終日保つ。時には燻り出すこともあるも、木尻だと言つて平気で居た。

○菜箱 漬物鉢を入れる箱で、何れの家にもあつた。小鉢を数個容るべき蓋付の浅き長方形の箱で、卍字形の把手が付て居る。朝の茶漬飯の時は菜は此の箱が持出さるゝのみ。漬物は季節に依つて種々変るが、梅干は年中常に在て、毎日梅干を食はぬ者はないと云ふ風であつた。香物は勿論菜葉胡瓜茄子等皆塩カラク漬け、殆んど醬油を掛けること無し。

○三度の食事の菜 普通昼飯が一番美しい御菜が出来たが、我家には父が晩酌するから、自然夜の時の善かつた。朝は漬物のみ、昼は美いと云ふても一汁一菜又二菜、其れに漬物位であつた。晩酌の酒肴も一種が普通で、刺身にした魚の骨を焼く煮る等のことはあつても、酒の



# 激動の幕末萩城下、松陰、高杉、久坂らの周辺で、 一般庶民はどう生きていたのか その日常生活、あそび、教育、風俗をありありと伝え、 防長史の欠落部分を見事に補う古老の覚え書き。



よみがえる幕末維新期のくらし

山口県立大学名誉教授 国守 進

われわれが歴史をしらべるために「文書」を読む時、ある種のもどかしさを感じることもある。それは文書がごく断片的な内容を伝えるにすぎない場合が多いからである。ところが、「記録」や「覚え書き」などと言うものは、ある事柄をまとめたかたちで示してくれるのであるから、研究者にとっては大変ありがたいといえよう。ことにそれが著者みづからの体験を飾ることなく書き留めたものである場合、大へん信頼性の高い記述となつて後世の読者に感銘を与えるのである。

林茂香の『幼時の見聞』は、安政五年（一八五八）に生まれた著者が、幼年時代のおそび、教育、年中行事その他萩城下での生活・風俗諸般、人物の思い出などを後年に至つて書き留めたものであつて、その記述にはきめのこまかい配慮がなされ、価値ある「覚え書き」となっている。

最近私は子供の歴史などにいささかの関心を持つているが、本書を一読したとき、何となしに、玉木吉保の『身自鏡』を思い浮かべたものである。これは毛利元就に仕えた玉木吉保の自叙伝的な覚え書きである。戦国時代の覚え書きにはすぐれたものがあるが、とりわけ『身自鏡』の評価が高いのは、当時の覚え書きの大部分が合戦に終始するのに対して、同書が合戦に限らず、みづからの生い立ちを述べているからであろう。林茂香の『幼時の見聞』も、幕末維新期の覚え書きの多くが動乱にひたされているのに対して、日常の生活や周辺の記憶を記し留めようとしているのであつて、この点、『身自鏡』と共通した価値を認めることができると思う。日常的で身近だからこそ、記されることも少く、また後世の人々の関心を引くことも大きいのであろう。

復刻後一世を経た今日においても、本書の評価については何ら変わるところを見出せないものであつて、今回の再刊はまことに時宜を得たものといえよう。

## 刊行にあたって

▼著者の林茂香翁は安政五年、萩の川島に生まれ、幼少の頃は岡田致翁（書家）、中村鼎（漢学者）、岡田謙道（医家）等の著名な学者に学び、山口県庁、防長新聞社、内務省等に奉職。昭和十年没。

▼本書は『幼時の見聞』と題して昭和十年、山口県立萩図書館の開館三十五周年記念に出版されたが、少数数の限定出版であったため、非常に有益な内容でありながら一般に知られず、稀覯本となつていた。

▼今回の復刊に際しては、題名を改めたほか、萩在住の地方史家田中助一氏の校訂により、誤植訂正のほか、初版にはなかった写真、注、句読点、ルビ等を加え、読みやすくした。

■本書は昭和五十五年に小社から復刻されました。このパンフもごく一部を除き、二十八年前の復刻版です。

## 幕末・明治 萩城下見聞録 目次

第一篇 士と足軽 称呼 子供のさそい言葉 手習場（教師 教室 座席 机・文庫 時間 休日 授業料 学級 進級 清書 手本 草紙 書体就学 脇師匠 番頭 罰 熊のご 書始 机文庫の正月飾り 通夜 萩の手習場）家塾（年令 授業時間 授業法 会読 講釈 詩 文 復文 授業料 机 休日 罰 郊外遊び 塾風）算術教授 岡田謙道先生 学問の急変化 夏橙の食始め
第二篇 殿様の御通り 番所 堀内 千部経 大照院・東光寺 御精進日 御紋の提灯 七夕の夜の騎馬 唐樋のさらされ者 鶯谷の首斬場 酒屋の杉看板 雛飾 たのも人形 五月幟 鮎魚 ほうせんぼう 縞いさき 灸 種痘 ささら三八宿 絞の手拭 お慰み 初婿の水祝 山田原欽先生 墓 釈迦の誕生 涅槃 さばい送り 昔の流行唄 鞠歌 羽突歌 とへく 伊勢神楽 はたせつなぎ 子供の遊戯（鬼さーご 盲鬼 由良鬼 猫が鼠捕った 油買に行ふか 柱まき 淀の河瀬 隠れご 草履隠し 駆りぐらご 馬ごー 竹馬 足高 鮑殻草履 石投げご 輪廻し 独楽 唐人 独楽 ぶち独楽 銭独楽 豆独楽 鞠投 橙投 大根投 紙鉄砲 杉鉄砲 水鉄砲 竹蜻蛉 大根弓 小供の庭 指しっぺい 九万蜂が刺した 四めしかずこ ほうとう 竹のおあげ へーひりこ 一ぶー 牛の皮へぎ 雛さごー おばさーごー お料理んご 花売 六日の菖蒲 亥の子餅 正月遊 手しほ廻 風 盆の遊）摘草 子供の喧嘩 子供の喧嘩の時の言葉 売声 子供の口癖
第三篇 松陰先生の片小影 吉田稔丸君の事 伊藤公の事 山県公の事 河野栄流君 幼児に忠孝談 女子教育 善事を母に内証で誉められた 亭主の帰らぬ内は枕を付けぬ 川島の鼻高面 主婦の毎日行事 米搗 餅搗 儀式に関する家憲 来客 火灯箱 昔の人の悪戯 昔の人の暴食 天保の大洪水 安政年度の萩の虎列刺 十五歳の少年が長太刀を差して旅行す 帯刀 御賞美祝 軍服を自家で仕立てる 戦死公報が半年後に来た 仏様の供物 昔の服装 衣服の数 男子の頭髮 料理屋の宴会無し 萩山口間の旅費 余が幼少時萩の学風 ガキゲゴの入鼻音
別篇 松陰門下は年少者より死す 山県伊三郎公 白根専一男の事 有 福直三郎君 馬関戦争余談 前原の変と会津の巡査 萩の葬式の途中行列 廃止 士族の旅行願 明治大帝山口御臨幸 伊藤公銅像碑の文字を書く 石黒男爵

■体裁 並製箱入 A5判二四〇頁

■特価 三千元（税・〒共）

■定価 四千元（税込・〒380）

■特価締切 平成20年10月20日

■発売 11月20日

▼書店不卸 ▼締切厳守 ▼返本OK

山口県周南市銀座2-13

☎0834②295

マツノ書店

URL <http://www.matuno.com>

（セット特価は申込ハガキをご覧下さい）